



『飾磨津』をたずねて

近世^{しなせい}、飾磨津^{しからづ}は姫路城下町の外港として、重要な位置を占め、飾磨区玉地の向島には、姫路藩の水軍御船手組^{おふなてぐみ}が置かれていた。この御船手組関係の遺跡を中心に、飾磨津の名残りを訪ねてみよう。

※古くは飭磨津、飭万津、飭間津、飾万津、鹿間津などの文字が用いられていたが、以下飾磨津で記す。

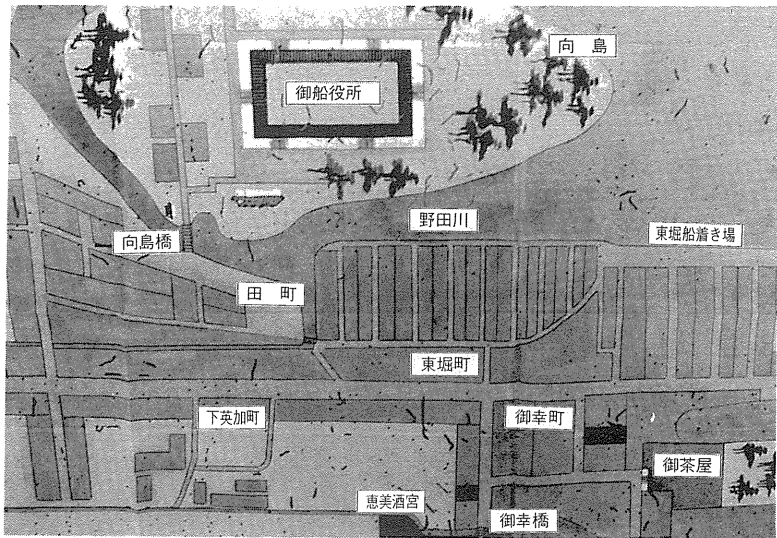
江戸時代、飾磨津といったのは、須加町、細江町、上町、大町、宮町、御幸町、東堀町、田町、上英加町、下英加町、都倉町の11か町を指す。このうち須加町、大町、宮町、御幸町、東堀町、田町の6か町を浦手。細江町、上町、下英加町、上英加町、都倉町の5か町を岡手^{うらて}とよび、東堀町には、姫路忍町以南の町方20か町を支配する町会所^{おかて}が置かれていた。上英加町は、現在の清水、下英加町は栄町、大町は大浜、田町は玉地。細江町と上町は明治10年に合わせて天神町と改めた。



四郷町山脇の道しるべ

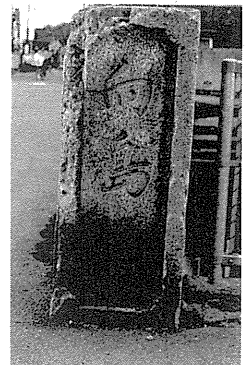


御船役所碑



御船役所図 (市教委保管の「飾磨絵図」より)

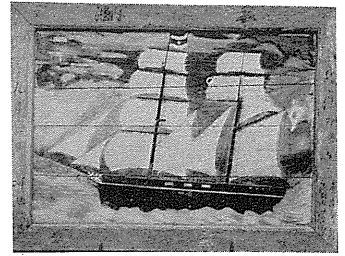
姫路藩御船役所跡・飾磨区玉地 御船役所は、御船奉行所ともよばれ、城主・池田輝政によって創設された姫路藩水軍の基地で向島にあった。役所内には、御船作事所、小船頭矢倉詰所、勘定役詰所、目付小奉行、棟梁総大工詰所、御船道具置場、馬屋などが置かれ、御船手とよばれる士族が常駐し、藩の海事業務を取り扱っていた。御船手組には、大船頭、小船頭、小頭、矢倉、使役、御水主、抱御水主^{おんかこ}の階級があり、保有船舶は、時代によって変動はあるが、約60隻、御船手組の定員は200名といわれている。飾磨の御船手には、藩主が国替えになっても従わず、そのまま新藩主に仕える「城付き」の特例があった。御船手の食禄は極めて低かったが、格式は、藩士の上級職なみであったといわれる。



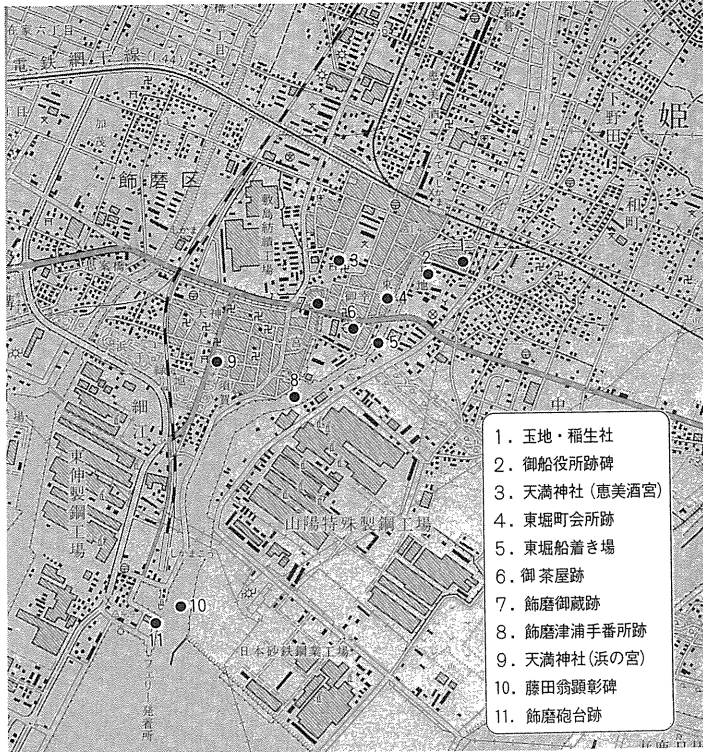
昭和9年架橋

じんごまる

神護丸図絵馬・天満神社(恵美酒宮) 飾磨の御船手、小船頭・下里次助外3名が奉納した絵馬。慶応3年(1867)9月3日の日付がある。嘉永6年(1853)幕府が大船の建造禁止令を解除してから、姫路藩が建造した西洋型帆船の一隻。藩の御用船であると共に商船としても利用された。正確な記録はないが、長さ49m、幅 8.2m、乗組員23名、ブリガンチン型帆船、1,200石積み以上と推定されている。藩校好古堂教授、秋元安民の建議により、アメリカより送還された漂流船・栄力丸乗組員の助言によって、飾磨津で建造されたといわれる。明治6年1月、品川を出帆、遠州灘で大しけに会い、伊豆子浦海岸で破船した。



神護丸図絵馬市指定文化財

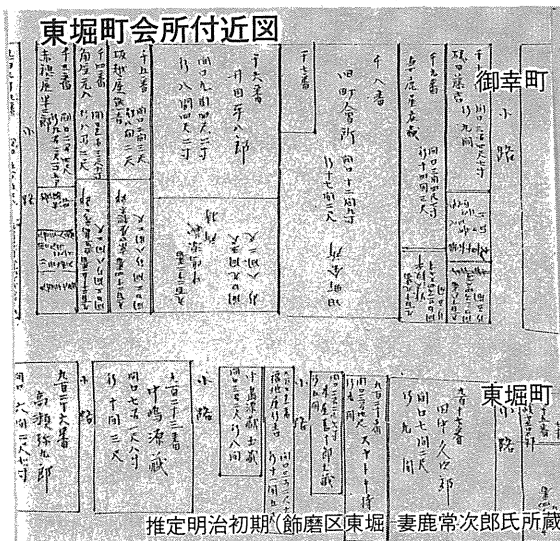


1. 玉地・稲生社
2. 御船役所跡碑
3. 天満神社(恵美酒宮)
4. 東堀町会所跡
5. 東堀船着き場
6. 御茶屋跡
7. 飾磨御蔵跡
8. 飾磨津浦手番所跡
9. 天満神社(兵の宮)
10. 藤田翁顕彰碑
11. 飾磨砲台跡



史蹟、旧姫路藩御茶屋之址
 姫路藩主神原政邦公先代忠治公ノ志ヲ続ギ創置セシ
 下屋敷ニシテ酒井公之ヲ継承シ明治初年迄存置セリ
 昭和十年五月建設

飾磨区御幸・東堀



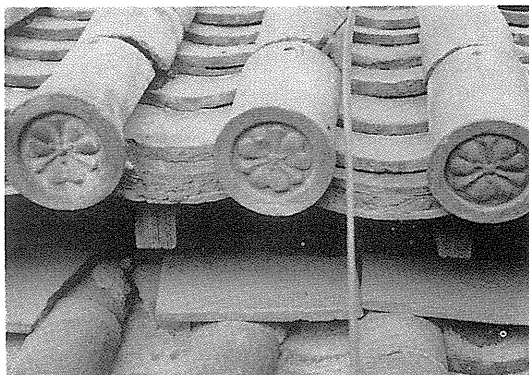
飾磨の町会所・飾磨区東堀 東堀は現在の湛保(飾磨港)が築かれるまでの古い港町で河岸には回船問屋が軒をならべ、大阪、兵庫、方面への船着き場として、大いに繁栄したという。文政年間(1818~30)、播磨の特産品であった姫路木綿は、船場川を利用して飾磨津東堀町の木綿荷扱所に回漕され、江戸積みが行なわれた。また、東堀町には、町会所が置かれていた。その跡は、明治6年、飾学学校に使用され、同10年、姫路警察署の飾磨交番所が置かれた。明治の初期まで同地に建てられていた金刀比羅神社も今はなく玉垣の一部は恵美酒宮天満神社境内に移設されている。

御船役所寄進の手水鉢・飾磨区玉地 いなお 稲生神社は、安政6年(1859)に船役所より現在地にうつされたといわれている。境内の手水鉢、井筒は、御船役所より寄進されたもの。文久2年(1862)御船役所、下里平太の名が刻まれている。『姫路城史』によれば、下里平太は、江戸末期の小船頭、勘定役を勤めた人。飾磨御船手唯一の石造遺品である。



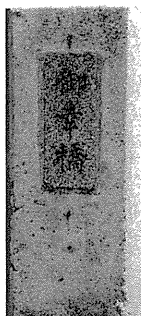
玉地・稲生神社境内の手水鉢

飾磨津浦手番所・飾磨区須加 飾磨津川口御番所ともよばれ、姫路藩が船舶出入の多い浦手に設置した番所。室津、高砂、家島にも置かれた。その任務は、とうろう堂(燈台)の管理、出入船舶の検問、取締り、海難救助、公儀船の寄港上陸についての情報収集にあたるほか、飾磨米蔵、御茶屋の警備も担当した。配置人員は、目付以下数名の定番が勤務し、鉄砲、弓などの武器も備付けられていた。同番所の位置は確認されていないが、飾磨区須加の民家が、川口御番所に併設されていた長屋の遺構と推定される。

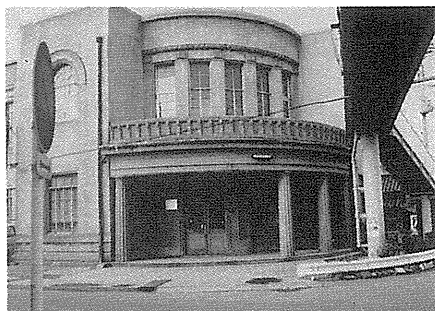


須加・酒井家紋の軒丸瓦

飾磨御蔵跡・飾磨区宮 姫路藩領内6か所にあった米蔵のうち、飾磨におかれたもの。船場川と宮堀川の水運を利用して、米やその他の物資の輸送がおこなわれた。現在の御幸橋西詰一帯は、米蔵の船着き場であった。(写真)は、もとの飾磨市役所の建物であったもの。

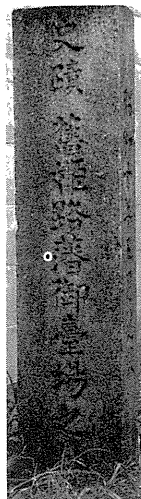


御幸橋



宮・飾磨御蔵跡

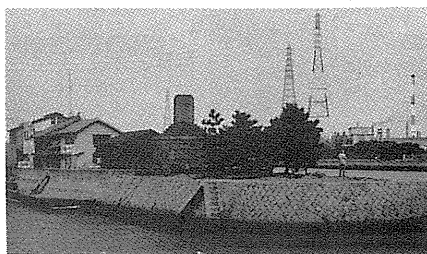
飾磨砲台跡・飾磨区須加 文久3年(1863)8月、姫路藩は海岸防備のため、飾磨に砲台を築いた。『飾磨町志』によると、湛保南側に半円形に海岸を1メートルばかり高くして、伊伝居の新在家山東麓で鑄造した大砲4門を配備したといわれる。大砲は、荻野流2門、西洋流2門の計4門、5名内外の砲手を10交替で常駐させ、網干沖に標的を置き実弾射撃訓練をした。現在埋立工事により遺構は消滅したが、お台場に使用したとみられる石垣の一部が残っている。

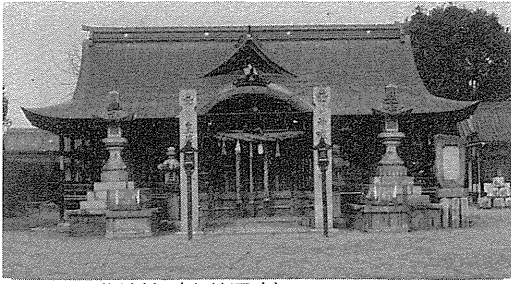


御台場の碑

藤田翁顕彰碑・飾磨区須加 弘化3年(1846) たみほ 湛保築港に功労のあった藤田祐右衛門の顕彰碑、大浜の人で肥料問屋を営む町人であったが、藩から室津交易会所詰を命ぜられ苗字を許されていた。築港は四国の丸亀港を参考に、工費600貫を使い、工事中排水のため水車40数台を使用したといわれる。

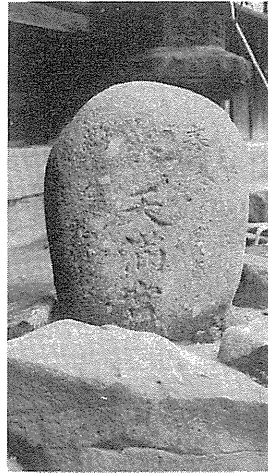
須加・湛保にある
藤田翁「顕彰碑」





天満神社（恵美酒宮）

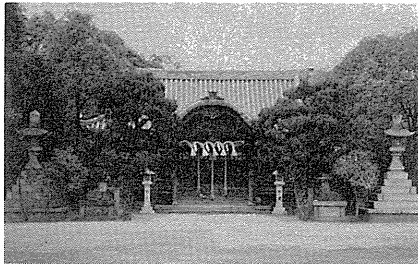
天満神社（恵美酒宮）・飾磨区恵美酒 社前の石どうろうは、京都の吉文字屋孫作の寄進、元禄11年(1698)のもの。東側拝殿入口の力石は、大浜岩吉が天保13年(1842)に奉納したもので、浜の宮にも同一人が奉納した同形のものがある。狛犬は、天保15年(1844)のもので尾道石工・嶋屋勘十郎の名が彫ってある。



恵美酒宮の力石



元禄の年号の石どうろう

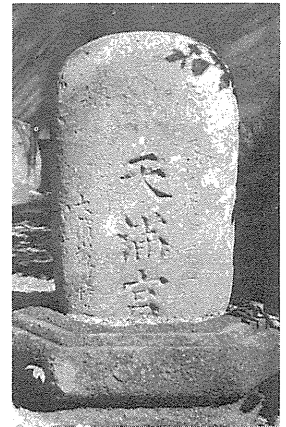


◀ 浜の宮



▶ 浜の宮の常夜燈

天満神社（浜の宮）・飾磨区須加 社殿横の石どうろうは、元禄12年(1699)のもの。境内の力石は天保13年(1842)、恵美酒宮の力石と同じ大浜岩吉の奉納。常夜燈には、魚問屋、生魚仲買中、宮町釣船中、魚売子中などの文字が彫られ漁業関係者が奉納したことを示す。ほかに手水鉢は、寛政10年(1798)。狛犬は、弘化3年(1846)。境内末社に、文化12年(1815)の石どうろうなどがある。



浜の宮の力石

飾磨津の道しるべ 「道しるべ」は、旅行者のために、目的地への方向、里程などを案内するため庶民の善意によって建立されたもの。飾磨津の道しるべには「ひろみね」を案内したものが多い。当時の広峯信仰を物語るもので、『播磨鑑』によれば、広峯神社南一の鳥居が、津田細江に、南二の鳥居が本殿より72町（約7.8キロ）の飾磨清水の北にあったと記されている。飾磨中部中学校に移されている道しるべは、天保3年(1832)のものであり、飾磨で最も古い。東堀公民館前に移設のものは、同町が建立したもの。



東堀・公民館前

	右 右川口 あぼし むろ津 嘉永元年戊申歳五月 東堀町	左 ひめぢ ひろみね やかそね 高砂
--	--	--------------------------------

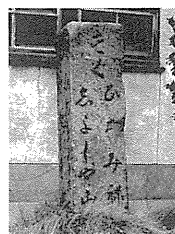
高97cm 27×27cm



飾磨中部中学校内

すく みなと	右 たんぼ	明治十四年 周旋人 角谷文七 巳九月吉日 岡崎庄右門	右 ひめぢ ひろみね あぼし むろ津
-----------	----------	-------------------------------	--------------------------------

高 139cm 31×34cm



飾磨中部中学校内

天保三壬辰年 十二月下旬建之	右 あぼし むろ津 すくふねのりば	左 ひめぢ 高きこ やかそね	すく ひろみね しよしや山
-------------------	----------------------------	-------------------------	---------------------

高 112cm 27.5×28cm